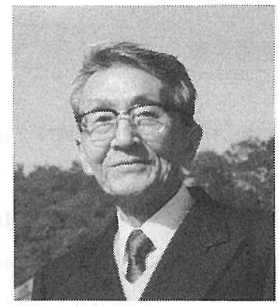
訃　報

伊藤義教先生のご逝去を悼む



上　岡　弘　二

本誌の編集委員としても尽力され，いくつもの論考を寄せられた，京都大学名誉教授の伊藤義教先生が1996年10月23日逝去された。87歳であった。

一昨年秋の日本オリエント学会第37回大会ではいつものように研究発表をされたが，その頃より，先生は体調を崩されていた。他人に迷惑をかけることを，病的なまでに厭われた先生が，この最後となった研究発表の原稿の再校正ができない，とのことで，私が担当した。『オリエント』第39巻第1号（1996年9月30日発行）に掲載された「ルリスタン出土の一青銅剣銘をめぐって」である。これが先生の最後のご論考となった。

ご逝去は，予期しないことではなかったが，私には唐突であった。イラン出発直前の9月22日にお見舞いに伺ったときには，意識もはっきりしていらっしゃって，とてもうれしそうなお顔を拝見できた。来春には，現在進行中の，先生の第4番目の著書も完成に近づくことでもあり，十分冬を乗り越えてくださるものと思っていた。この本が完成するまでは絶対に亡くなられることはない，という奇妙な確信が私にはあった。それほど，先生はこの書にすべてを注いでいらっしゃった。

先生はこれまで3冊の和書をお書きになっている。いずれも岩波書店よりの発行である。刊行順にあげると，（1）『古代ペルシア―碑文と文学―』1974年（昭和49年），xxii頁，335頁，30頁；（2）『ゾロアスター研究』1979年（昭和55年），xxvi頁，500頁；（3）『ペルシア文化渡来考――シルクロードから飛鳥へ――』1980年（昭和56年），xiv頁，196頁。これらの和書が示すように，先生のご業績は，次の2分野に分けることができる――

1．原典研究とその釈義・翻訳：アヴェスターならびに古代ペルシア語碑文はもちろんながら，特に先生の本領とされたのは，パフラヴィー語テキストの文献学的研究であった。その訳出には絶対の自信をお持ちであった。事実，先生の読みの深さと直感力には凡人のとても及ばないものがあった。また，碑文に関しては，本誌の第13号（『足利惇氏教授退官記念オリエント研究特集号』1964年，17-34頁）に掲載された「西安出土漢蕃合墓誌蕃文解読記」を忘れることができない。当時の樋口隆康助教授を通して，中国より依頼のあった西安市出土のパフラヴィー語墓誌をすぐさま解読して，日本のイラン学の水準を世界にお示しになった。

2．語源と語義研究：先生独自のテキストの解釈に基づいていくつもの新語源と語釈を，ア

ヴェスター語,古代ペルシア語,パフラヴィー語について提唱された。先生の最後のご論考においても提唱しておられる,これまで解釈不十分であった語形を,アラム・イラン混成語形として新しく解釈しようとする試み,さらに,パフラヴィー語音をもって,日本書紀,万葉集中の問題語を解釈しようとされた試みもここに入れてよい。

ところで,『ゾロアスター研究』以降の先生の研究とその研究姿勢に対する批判がないわけではない。過剰な個人的感慨を含む嫌いがあるが,この点では,故岩本裕先生が,その個人誌『迦楼羅』第1号(昭和55年1月)に執筆された『ゾロアスター研究』に対する書評は逸することができない。

なお,既刊の先生のご著書は以上の3冊であるが,上にあげた最後のご論考の後注(8)に"拙著『ゾロアスター教論集』平河出版社(印刷中),pp.51-52"とあるように,現在4冊目が準備中である。ここには,『ゾロアスター研究』以降の,先生の主要論文の改定増補されたもの,ならびに,110頁に及ぶ『断疑論』——イスラム世界とイラニズムとの接点を解明するのに必読の文献——の全訳が収録されている。先生の業績の最大のものは,いうまでもなく,パフラヴィー語文献の読解である。この部分は先生の最も優れたご業績の一つになるにちがいない。本書は,詳細な索引付き,550頁を超す大冊で,最初のご命日にご霊前にお供えするつもりで現在進行中である。

別に伊藤先生に限ったことではないが,特に先生の学説には,良くも悪くも,自分を語っていらっしゃるところがある。泉井久之助先生は,「伊藤イラン学」といみじくも名付けておられた。また,先生ご自身が,必ずしも自戒の弁としてではないが,"要は2×2が6にも8にもなるというような発想が必要だが,結果的には2×2はやはり4で,もっとも平凡で無理のないものが真実をついていることになる"(『京大広報』No.308,1986年3月15日)とお書きになっている。伊藤先生は,生涯,イラン語圏のいずこも行かれたことがなかった。お耳が遠くなられてからは,なおのこと,先生は,徹頭徹尾机上のテキストの人となられた。このことが,先生の学問的推論に,独創的で,自由闊達なそしてときには奔放すぎる翼を与えた。先生の残されたご業績のうち,どれが6でも8でもなく,「もっとも平凡で無理のない4」に当たるのか,その的確な検証も残された私たちの大切な仕事である。

先生はお幸せだったと思う。ご生前もご入院後も奥様とお嬢さんの恭仁子さんの献身的なお世話をお受けになっていた。ご法号は盡奥院釋義教,盡奥院はまことに先生のご法名としてふさわしい。先生のご遺志により,西南アジア研究会,オリエント学会にご寄付あった。

願わくば,先生のフラワシ(守護霊)が,この先長くわれわれ後進をみそなわし,暖かく導きたまわんことを。

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)